

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | Mervyn Crobaugh, Economics for Everybody from the Pyramids to the Sit-Down Strike, 1937   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 高橋, 誠一郎   |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会  |
| Publication year | 1938  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.8 (1938. 8) ,p.1141(131)- 1149(139)  |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19380801-0131  |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380801-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19380801-0131</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

更に如何に統制が強化されても個人的經濟活動の範圍は依然として大なるものがあり、企業者の經濟行爲及び構成と全體經濟との關聯はこれを統計的に規定する事甚だ困難である。彼が當局が不備な資料から大膽な計畫經濟を企てるの危険を指摘し、官僚獨善主義を排撃してゐるのは、現下の情勢に鑑みて甚だ適切な所説と言はねばならぬ。

猶ほ卷末に附された文献は二百に達し、最近問題とされた統計學關係の主要著作は殆ど網羅されてゐる。尤も英米の文献の極めて乏しく、佛伊あたりのその全く省略されてゐるのは遺憾である。

Mervyn Crobaugh, Economics for Everybody from the  
Pyramids to the Sit-Down Strike, 1937.

高橋 誠一郎

本書は物語風に極めて平易に書かれた經濟思想史である。著者は一千九百二十六年、米國スタンフォード大學に於いて哲學博士の學位を授けられ、インディアナ大學及びワシントン・リー大學に於いて教鞭を執れる人であると云ふ。

著者は「經濟學は東洋に起つて、西方に移つた」と做して、先づ埃及人、巴比倫人及び希伯來人の經濟思想に筆を起す。彼れは言う、ピラミッドが國王等の遺骸を葬る墳墓として役立つたことは一般に知られてゐるが、是れ等の驚く可き記念物の建設が又、絶えず埃及人を悩しつゝあつた經濟問題の一つを解決せんとする彼れ等の企圖を反映するの事實はさまざま多く悟了せらるゝことがない。埃及人は農業民族であつて、彼れ等の仕事の大部分は季節的性質を有するものであつた。是に於いて乎、埃及人はピラミッドの建設に依つて是れ等の仕事なき期間に於いて、其の人民に仕事を與へんことを企圖したのである。(Pp. 22-23)。著者は這般の論述に於いて、餘りに大衆受けを

Mervyn Crobaugh, Economics for Everybody from the Pyramids to the Sit-Down Strike, 1937. 131 (1141)

狙ひ、古代に於いてすら或る種の経済的計画(economic planning)の行はれたることを強調し、埃及の金字塔を以つて、人民に職を興ふるを目的とする公事業の長期計画(Long range planning of public works in order to provide employment for the people)を表示するものと説き、現代との類似を指摘するに急であつて、彼れ自ら充分に意識しながらも、其の讀者の注意を古代社會に於ける勞働の性質と現代に於ける其れとの間の相違に向はしめんとすることなく、輒もすれば、埃及王の起せるピラミッド建設の事業を以つて今日の失業救済の事業と同一視せしむるの虞れあることを吾人は遺憾とする。

著者は又、同一の筆法を以つて、其の兄たちの爲めにイシマエル人に賣られて、埃及に至り、國王の侍衛長の奴隸と爲り、國王の夢を判じて、埃及の全地に七年の大豊作の後に、七年の凶作起る可きことを豫言せる希伯來人ヨセフを以つて、初期の經濟觀測家と做してゐる。而して、ヨセフの建てた策は、實に七年の豊年中に國內の五分の一の糧食を斂めて、之れを邑々に藏し、來る可き饑饉に備ふるに在つた。(p. 24.)

著者は「安息年」(sabbath year)の制度を以つて、専ら七年目毎に其の債務者を釋放す可きことを宣言せるものと看做し、斯制度が固と、土地の所有者をして六ヶ年間は其の土地の上に播種し收穫するの權利を有せしむるも、七年目には必ず其の土地の耕作を廢止して、之れを休養せしめ、而して同年内に土地の生産せる物をして主として貧民の權利に屬せしむ可き旨を定めたものであることを忘れたるが如くである。(cf. p. 29.) 債務の解除は、寧ろ該制度の適用範圍擴張に由るものである。

著者は第二章に於いて、希臘哲學者等の經濟思想に就いて述べ、利子の徵收に關するアリストテレースの觀念の重要性を認めたことは固より當然の事であるが、而も、此の大哲學者が貸金業を以つて、人爲的形態に於ける取財

術の極端なる發達と做し、是れを以つて、徹頭徹尾、不自然にして嫌惡す可きものと説くに當り、特に「小金貸業務」なる文字を使用し、大金融業務に之れを適用するを避けたるの觀ありし事實を注意することなく、其の眞意が果して一切の利附貸付を非難するにあつたか、若しくは又、單に高率の利子を以つて窮民に小額の貸付を行ふ者のみを排斥するに在つたかを考察することなかりしを吾人は不満とするものである。

第三章に於いて、著者は羅馬時代に論入し、羅馬社會に於ける階級的分離が主としてパトリッキイ即ち貴族階級(the patricians, or noble class)及びプレブス即ち平民大衆(the plebeians, or the mass of common people)を代表しつゝある集團の間に存したと説いてゐる。(p. 43.) 斯くの如きは、寧ろ通説と觀る可きが如くであるが、吾人は此の點に關しても亦、異論なきを得ない。パトリッキイ對プレブスの闘争は、元來、政權を有する固有の羅馬民と政權なき獨立の自由民との間の闘争である。而して其の究竟の結果は是れ等兩階級が民事上の諸權利に於けると等しく、政治上の其れに於いても亦、完全なる平等を享有して、單一なる羅馬市民と成れることである。而して此のパトリッキイ、プレブス兩階級の一致が成立して後、幾許もなく、是れ等兩階級中の富裕なる者から新たな貴族は形成せられて、其の黨與の爲めにあらゆる地位を略取するに至つたのである。此の舊貴族が大地主及び金持の新階級に融合して出來上つた新たな貴族が nobles である。即ち、プレブスの勝利が得られた時、彼れ等の領袖は舊貴族と結合して新たな貴族を發生せしめたのである。紀元前三百六十七年のリキニウス法(Leges Liciniae)の通過後、パトリッキイ及びプレブスの兩黨は共に分裂を生ずるに至つたのである。而して吾人が曾つて本誌上に於いて觀たるが如く、プレブス中の右翼たる富者は同法の通過後、彼れ等が贏ち得たる政治的平等、官職に就き得るの資格を以つて悉く満足し、更らに是れ以上の何物をも要求しようとはしなかつたに反し、左翼たる貧民は政治

的平等の略取を以つて更らに其れ以上の發展の前奏曲と看做し、或ひは是れを以つて社會革命の前衛戦とすら觀んとしたのである。

著者クロバツ博士は又「プロレタリア」を以つて、彼れ等の子孫、即ちプロレスの外、其の存在を保證す可き何物をも有せざるものと做してゐる。(p. 44)。恐らく、博士は *proletarius* なる語を以つて、子女の父たるに由つてのみ國家に奉仕し得る者の義なりと做す從來の通説を其の儘に踏襲して居るのであらうが、然も、這般の見解に對して、是れを以つて、自己の土地に定住する裕福なる納税市民、即ち *assiduis* の相續權を剝奪せられたる子孫を意味するものと觀るの意見が次第に有力と爲りつゝあることを知らなければならぬ。

## 二

第四章に於いて、著者は中世の基督教經濟學説を述ぶるに當つて、終始「諸教父(*The Church Fathers*)」の經濟理論なる言辭を使用し、基督教理を確立せる諸教父の經濟思想と、基督教理の支配下に古代哲學を再生せしめ是れ等二體の教理から究竟科學の單一普遍の體系を構成しようとしたスコラ哲學者の其れとの間に區別を立てなかつたことを吾人は不満に思ふ。

著者は又、諸教父が利附貸付に對して反對の態度を取れることを述べ、斯くの如き態度は大部分、此の時代に於ける貸付の最多數が「消費貸付」であつた事實に基けるものであると論じてゐる。(p. 50)。斯くの如く當時に於ける債務の性質によつて中世の利子禁止意見を解釋せんとするの論は、是れ迄、幾多の學者によつて屢々試みられた所であるが、私は這般の單純なる論據では、到底、西紀第十二世紀の頃から頗る峻烈の度を加へた基督教會の金貸に對する態度を解釋することを得ざるものであると考へる。此の點に關する詳細の議論は今之れを避ける。

博士は中世の間に顯著と爲れる最重要なる經濟教理を以つて、恐らくは公正若しくは自然價格の其れであらうと説き、而して這般の公正價格は其の物品を生産するの勞働及び費用に基く可きものであつて、斯くて貨物の價值は財貨其の者に附着せるものであり、客觀的のものと思惟せられたと論じてゐる。(p. 51)。斯くの如き解釋はアルベルツ・マグヌスの所論には當て嵌るが、而も彼れの弟子トーマス・アクイナス以後に於ける正價論の變遷には安當せざるものである。吾人は初期の教理に對する最も重要なる修正が、眞價若しくは一般價値の基礎として費用を輕視し、(固より費用は猶ほ依然として價格中に算入せられはするが)、效用を以つて之れに代へんとするの傾向に現れたことを認めなければならぬ。

著者は莊園の「封鎖的家内經濟」に就いて一言したる後、今日の多數都市に於ける地方商人等は、チェーン・ストアと戰ふの一助として少くとも中世の此の部分復活するを以つて策の得たるものと信する旨を述べてゐる。彼れは更らに、斯くの如き自給自給制度が失業者を處置するに役立ち得可きことも亦、提唱せられた所であると説いてゐる、尙ほ又、中世のギルド制度に就いて一言せる後、直ちにギルド社會主義者の思想に言及するなど、著者は常に「故事を温尋して、又、新事を知る」の心懸けを怠つてゐない。而も、彼れが遂に中世末期に於ける貨幣學説の發達を考察することなくして止めるは遺憾である。従つてかの「惡貨は良貨を驅逐する」と做す法則の成立の如きも、彼れは之れを第十四世紀に於けるニコール・オレームの著書に覓めずして、第十六世紀に於けるサー・トーマス・グレシャムのエリザベス女王に對する進言に求める。(p. 64)。

## 三

第二部第五章に於いて重商主義が論ぜられる。著者は國主的重商主義のみを觀て、本然の意義に於ける重商主義、

即ち商人的重商主義を注意してゐない。彼れは重商主義者が金を確保するの手段として外國貿易に最高の重要性を置くことを説いてゐる。重商主義者が金銀保有の重要な所以を強調し、其の蓄積を確保するが爲めに幾多の規制拘束を推奨したことは事實であるとしても、彼れ等の重視したのは金銀であり、屢々金よりも銀に對して注意の拂はるゝことの多かつた事實を認めなければならぬ。著者は現代と近世初期との類似を求むるに急なるの餘り、不用意に斯くの如き文字を使用したものであらう。博士は、世界大戰後に於いて、合衆國が重商主義的諸政策の最も包括的なる行使を行へる旨を指摘してゐる。吾人を以つて觀れば、現代は正さに一面に於いては重商主義的時代を踏み越えて、是れよりも更らに古き地主主義的時代に復歸しつゝあるのである。

第六章は重農主義に當てられる。吾人は茲では、もつと、佛蘭西に於ける工業發展策に基ける穀物輸出制限の犠牲と爲つた農業資本の利益が自由貿易を要求せしめた所以を明確に表明して貰ひたかつたと思ふ。著者は第七章に於いてアダム・スミスを論じ、スミス時代に於ける分業の影響と現代の機械工業に於ける其れとを對比し、「科學的管理法」やテクノロヂカル・アンエンプロイメントに迄も言及する。第八章はマルサスの爲めに割かれる。著者は、マルサスが餘程の研究と沈思の後に於いて、ゴッドウィン等の所論が正しからざるものであると云ふ結論に到達したと説いてゐるが、(p. 85)、而も、マルサスの『人口論』初版は決して彼れが多年思索の成果ではなく、彼れの手近かに存した極めて僅少なる資料に基いて著された、どちらかと云へば軽い述作であつた。著者は又、マルサスが『人口論』初版執筆の當時から収益遞減法則を體得して居つたかの如くに説いてゐるが、(p. 86)、此の法則は人口論中に論理上含意せられながら、其の初版中に於いては明確に叙述せらるゝことなく、再版に至つて幾分の明瞭さを加へたに過ぎないものであつて、其の明示は一千八百十五年の『地代の木質並びに増進の研究』に俟たなければなら

ない。

斯くの如く吾人に取つては、不満なる論述、遺憾とせらるゝ點、不正確と思はるゝ箇所が甚だ多いのであるが、兎に角、著者の筆は些かの停滞を見ずして、流暢に走せ、第九章に於いてはリカードオ、第十章に於いてはフランクリン、ハミルトン、ケリー及びリスト等の米獨學者、第十一章に於いては、サン・シモン、オーエン、フリーエ等の空想的社會主義者、第十二章に於いてはジョン・ステュアート・ミル、第十三章に於いては、カール・マルクスを論じて第二部を終る。

#### 四

第三部に入つて、著者は、先づ第十四章に於いて、限界效用學派、第十五章に於いて正統學派(著者は正統學派なる語を、ミル以後に於いて、古典學派の學説を支持する新古典學派の意に解してゐる)、第十六章に於いて、數理經濟學者及び景氣變動經濟學者に就いて述べる。古典學派及び正統學派は經濟組織の長期の運動を重視し、特殊の時機に於いて發生する動搖を以つて、一時的であり重要ならざるものとして、そこそこに之れを片付けるの傾向あるに反し、景氣變動學派は動搖が原則であり、圓滑が例外であると信ずるの傾きがある。(p. 180)。

第十七章は「商學部。實際的たらしめられた經濟學」と題せられてゐる。私は此の章を一番面白く讀んだ。多數の經濟學者等が斯學をして一層正確ならしむることが必要であると斷定せると時を同じうして、他の大集團は之れをして更らに實際的にして實業家に對して明確に役立つものたらしめんとするの準備を進めた。此の集團は經濟學が經濟組織の理論化を持續し、若しくは之れを批判するによつて何處に於いても利得することなかりしを感じた。先づ第一に、斯くの如き態度は、實業家をして、經濟學者等が過激主義者であるか、若しくは一度び誘惑を受くるや

直ちに過激主義者と爲るの虞れありと做すの疑念を抱かしむるに至つた。而して愈々益々、諸大學は、自己に對して寄附行爲を行ひ、其の評議員として盡力す可き實業家の力を借らんとしつゝあつたが故に、彼れ等の間に斯くの如き疑念が生ぜしめられたとするならば、そはあらゆる當事者に取つて甚しく氣味の悪いものであつたであらう。斯くの如き葛藤を避くるは固より望ましいことであつた。而して逐年増加しつゝあつた大學入學者は彼れ等をして、最短時間内に實業界の人と爲り而して百萬長者と爲るの準備を行はしむ可き訓練を得んとするの念が最も切なるの觀があつた。斯くして、這般の需要に應じて、極めて短少なる期間内に「商學部」が全國に亘つて組織せられた。而して經濟學者等は出來得る限り實際的と爲るの必要を感じし、急速に理論の教師から、商業、鐵道業、配給(マーケッティング)、畜産、小賣術及び廣告術の教授と變じたのである。是れ等の商學部は著しき反對と疑念とを激發することなくして發達することを得なかつた。多くの論争を生ぜしめた最初の問題の一是、經濟學と商業若しくは營業の間に劃せらる可き嚴密なる分界線であつた。其の主眼を實際的方法に於いて教授すること能はざるか若しくは之れを欲せざる舊經濟學教師の或る者は、「經濟學」は「商業」よりも遙かに廣き學問であつて、截然分立せしめらる可く、而して須らく上位のものとして承認せらる可きことを主張する。他方に於いて商業の教授たちは彼れ等の主題が學生のより多くを吸引し従つて又、彼れ等の部門がより大なる經費を獲得し得るが故に、彼れ等は「商學部」及び「企業經營學部」を形成して、獨立に行動することを許さるか、若しくは彼れ等は「經濟學」の教授を支配す可きものであることを要求する。而して商學部は總べての方面に進展し、より新たにしてより驚く可き科目を採用し、總がて「原價計算」から「手荷物運搬」や「皿洗ひの方法學」(Methodology of Dishwashing)に至る迄、其の欲するあらゆる商賣及び職業に對して自己を訓練することが霸氣ある若い「實際的經濟學者」に取つて可能と爲つたのである。

之れに對して「經濟學」教師中の頑固な者は「商業」が諸大學に於いて教授せらる可き適當なる學科たることを拒否し續けた。彼れ等は、斯くの如き科目はタイプライティングや速記と共に、商工學校に屬すると主張する。「經濟學」と「商學」との間の争議は未だ完全に落着してはゐない。(pp. 182-185)。

第十八章に於いては無政府主義者、サンディカリスト、ギルド社會主義者、第十九章に於いては、ボルシェヴィクスと其の五個年計畫、第二十章に於いてはファシズム、第二十一章に於いては、均衡論者、連帶主義者、全體主義者、團體主義者、制度主義者、第二十二章に於いては、經濟的計畫運動、テクノクラシー、メージャー・グラフスによつて唱へ出されたソシアル・クレディット運動、アプトン・シンクレアを中心とする「カリフォニアに於ける貧困終止運動、即ちエビック運動、タウンSEND養老金計畫等の如き世界的不景氣時代に於ける經濟的思索、第二十三章に於いては、共產主義及び其の他の過激的思潮、第二十四章に於いては、ニュー・ディールが論ぜられてゐる。

著者は卷末「經濟的展望」に於いて言う、「資本主義は其の存在の一百五十年間に於いて無量の變化を遂げた。アダム・スミスは、彼れがあれほどまでに其の將來を輝かしく描寫した子供を殆んど認識することがないであらう。資本主義は變化を續けて行くであらう。問題は舊制度——資本主義、利潤制度、個人主義——が保持せらるゝや否やではなくして、如何なる方向に於いて、又如何に急速に此の制度は推移するかである」。(pp. 283-284)。

(定價二弗五十仙、丸善實價金九圓二十五錢)。